

大阪大学 発祥の地「中之島」



堂島川をはさんで医学部(右)、附属病院(左)、中央は田谷橋

今から85年前の1931年、大阪大学は、中之島の地に大阪帝国大学として誕生しました。しかし、1993年の医学部・同附属病院の吹田キャンパス移転を最後に、中之島から大阪大学の姿が消えました。現在は、その跡地に大阪大学中之島センターが建っています。中之島周辺には、美術館、テレビ局や大企業、公的機関のビルが多数並び、文化・芸術の集積地となっています。

そもそも中之島とは一体どういう地なのでしょう？

今回の特集では、1997年7月から1998年1月まで当時の学報(現在の阪大NOW)に連載されました脇田修名誉教授の「大阪大学夜話」をもとに、大阪大学発祥の地、「中之島」を振り返ります。

※参考文献：学報No.524～526(1997.9～11)「大阪大学夜話」第三～第五話から
※本特集で使用している資料で特に表記のないものは「写真集 大阪大学の五十年」から転載しています。

大阪大学夜話 『大学の旧地(1)』

大阪大学 名誉教授 脇田 修

現在、大阪大学は、旧帝国大学時代の土地を離れて、吹田と豊中に集中している。ここではその旧地の歴史について記しておこう。

大阪帝国大学は、大阪市北区中之島と堂島に医・理学部などがあり、工学部は都島にあった。いずれも島とつく地名なのは、淀川下流の中島だからである。とくにこの中之島・堂島は大阪の心臓部になっており、近くには大阪市役所・大阪高等裁判所・朝日新聞社などの重要施設が並んでいる。まず、この歴史を書いてみよう。

堂島の地名の由来は、地形が鼓の胴に似ている、また天王寺の御堂建設の資材をおいた、薬師堂があった、小川某の五花堂があったなど、さまざまな意見がいわれているが、よくわからない。

ただこの辺には、中世では崇禅寺の領地があった。崇禅寺は細川持賢が將軍義教の菩提を弔うために建立したもので、中世では大寺院であり、近世では遠城兄弟を生田伝八郎が返り討ちにするという珍しいことがあり、芝居になった崇禅寺馬場の仇討ちがあった。いまは阪急京都線の駅名だけが知られている。

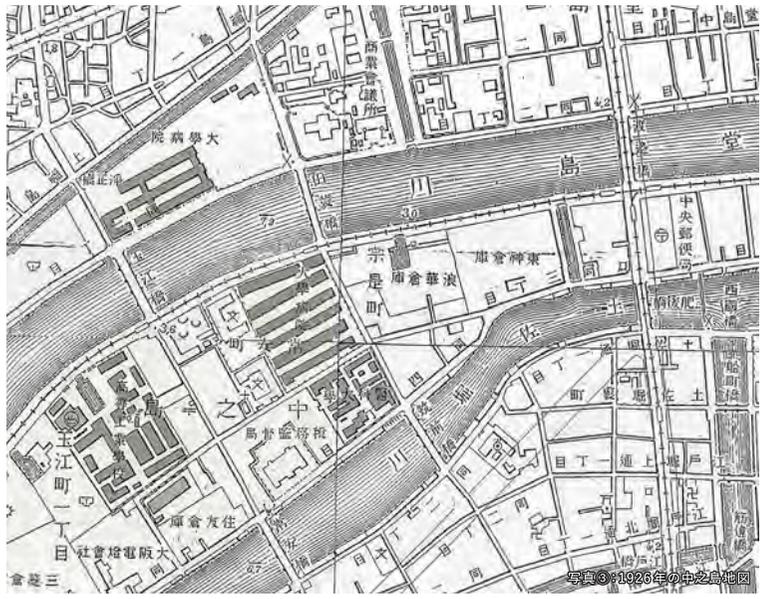
さて寛政2年(1462年)の寺領目録には、北大阪一帯の寺領が記されている。おもしろいのは阪急本社のある梅田の角田町が、「埋田之内角田」として出てくるので、私はそれをよく紹介している。さて、ここには曾根崎・福島・国分などとともに堂島も出てくる。それは7反220歩と1反138歩の畠で、広い方の土地の東隣は福蔵庵の田地であるが、他は河となっている。いかにも大川の中島らしい土地に、ようやく田畠が開けていったことを思わせる。これが中世堂島の風景であった。

もうひとつ中世の堂島を伝えてくれるのは、田蓑橋である。世阿弥の謡曲「芦刈」は、落ちぶれて芦売りになっていた男が、天王寺で妻と再会して都へ帰るとい筋で、なにわを舞台にした名曲であり、谷崎潤一郎に同名の小説があることでも知られる。この曲では、なにわの名産である深江(大阪市東成区)の菅笠に因んで、笠づくしの「笠の段」が見せ場になっている。なにわは水辺で、葦・芦や菅が繁る土地であるので、芦刈りや菅笠を取り入れた内容になっている。笠の段は「雨に着る、田蓑の島もあるなれば、露も真笠の笠はなどかなかるらん」と謡いはじめ、舞い終わって、笠をさっと投げる。ここに田蓑の島が謡われている。今は田蓑島とはいわないが、旧医学部本館の前の堂島川には田蓑橋(写真①、②)が架かっていて、中世からの由緒ある地名を伝えている。

このようにみると、大川の中の島とはいえ、中世以来の由緒をもった土地であることがわかる。



1981年頃の中之島地区



写真③ 1926年の中之島地図



中之島地区一帯手前中央が医学部川をへたてて附属病院(1931年)



昭和初期の大阪御堂筋(大阪市産業大前より)



写真① 田蓑橋(1931年)



写真② 田蓑橋(1997年 学報No.524から)

『大学の旧地(2)』

前回に続いて大阪大学の旧地について記しておこう。元の本部などがあった地域は、近世に入って開発された土地である。

今はないが、かつては中之島3丁目から6丁目にかけては、宗是・常安・次郎兵衛・小倉屋仁兵衛・庄村新四郎・塩屋六左衛門と人名のついた町が多かった。これは開発者の名を町名にしたものと考えられる。また大阪帝国大学の北の堂島川には、前回に触れた田蓑橋と玉江橋があるが、南の土佐堀川には、筑前橋と常安橋さらに下流には越中橋が掛かっている(写真③)。これも往年の歴史を示すものである。

この地域には各藩が年貢米や特産物を国元より運び、販売するため、蔵屋敷がおかれていた。そのため水運の便のよい大川の周辺、中之島・堂島辺には130余の蔵屋敷がおかれた。大阪大学の旧地は、幕末には広島・久留米などの蔵屋敷があった。もっとも今は蔵屋敷はなくなり、近代

建築がならんでいて、かつての有り様を偲ぶことはできない。そのなかで筑前・常安などの橋名のみが、わずかにその歴史を伝えてくれる。

さて筑前橋は、筑前・黒田家の蔵屋敷前にあった橋である。黒田家は如水黒田孝高・長政を始祖とし、福岡を城下町とした52万石の大名である。蔵屋敷の建物はないが、その長屋門が残っていて、天王寺の大阪市立美術館横に移築され、往年の蔵屋敷群のなかで、唯一の遺構として姿を止めている。また越中橋、肥後橋も同様で、肥後の細川越中守、肥後殿の橋である。

これに対して常安橋は、淀屋の初代である淀屋常安の架けた橋である。淀屋は山城の淀から出たといわれるが、初期からの豪商であり、大名貸をおこなっていた。將軍綱吉の代に淀屋は取り潰されるが、その屋敷前に架けた橋が淀屋橋で、御堂筋にあり、大阪の中心地となっている。常安橋はあまり知られていないが、

これも淀屋の架けた橋であった。おそらく中之島の開発から架橋したのであろう。

現在なら、橋は国や府・市の公共団体が架け、管理しているが、近世では異なっていた。幕府は防衛などの観点から必要な橋しか作らなかったから、水の都といわれ百数十の橋があった大坂でも、幕府の架ける公儀橋は、大川にかかる天満・天神・難波の諸橋や東横堀に架かる高麗橋などの12橋だけであった。それ以外は受益者負担もいところで、近くの町や個人・藩が架けたのであった。例えば、戎橋なども周辺の10以上の町が管理していて、もっとも近い町が多くを負担し、遠くなると少しずつ減額することにしている。

大阪大学の旧地である中之島辺では、藩や豪商が必要に応じて架橋したのであった。



大阪府立高等学校病院



福澤諭吉誕生地の地(当時)(学報No.526)

『大学の旧地(3)』

さて、創立年次の早い医学部から見ていこう。
 大阪での医療・医学教育は、緒方洪庵の適塾などの伝統もあって、かなり早かった。
 明治元年(1868年)仮病院、翌年には大阪府病院がつくられ、医学教育がおこなわれたが、そののちいくつかの変遷を経て、西本願寺派の津村別院内にあった大阪府病院は、明治12年(1879年)中之島4丁目に移転して大阪公立病院となり、さらに大阪府立病院・医学校などとなり、明治36年(1903年)大阪府立高等医学校となった。そして大正4年(1915年)大阪医科大学に昇格した。これが大阪帝国大学医学部の前身である。
 さて大阪大学医学部の旧地は、大阪公立病院が旧広島藩蔵屋敷跡の官有地に移ってきたことに始まる。これは木造であるが、中央に洋風の尖塔をもつ、当時としては華麗な建物である。写真が残っているが、病院前には人力車が多数待っている。今の病院前のタクシーの行列を思わせる。
 本部の対岸には、医学部病院があった。元は病院も医学校とともにあったが、大正6年(1917年)病院から失火して、大学本部などを焼いたさい、この再建にあたって、病院が対岸に移ったのであった。
 ここは現在の大阪市の行政区分では大淀区福島になっている

が、元は堂島のなかにあり、近世では堂島新地5丁目にあたる。ここも堂島川と蜷川(曾根崎川)にはさまれた島であった。この蜷川の梅田堤は、近松の「曾根崎心中」のお初徳兵衛の道行でしられるが、蜷川は明治42年(1909年)の北の大火のあと焼失した家屋などの瓦礫によって埋め立てられ、道路となっている。
 さて、堂島という思い浮かべるのは、日本の米相場を左右した堂島米市場であるが、これは東部の舟大工町にあった。西部の病院付近には、幕末には尾張・秋田・久留米・延岡・中津・富山など諸藩蔵屋敷があった。中津藩蔵屋敷は福沢諭吉が生まれた所で、誕生地の碑が建っているし、病院内には産湯の井戸跡が示されていた。明治政府は蔵屋敷を官有地としたので、ここには公共施設ができた。そのなかには堂島中学校・堂島女学校もあったが、これがのちに移転して北野高校・大手前高校となった。

● 脇田 修(わきた おさむ) プロフィール

1931年大阪生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。京都大学文学博士。大阪大学文学部教授、文学部長、評議員などを務める。94年大阪大学名誉教授。大阪大学出版会会長、大阪歴史博物館館長などを歴任。



現在の中之島